

9 章 環境行動を科学する

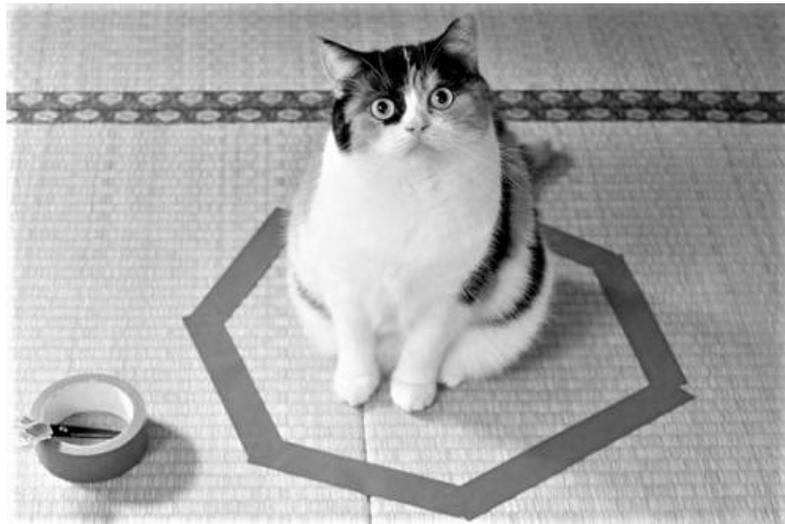
／思い、考え、試す

9-1 監訳者によるまえがき

9-2 意味の重要性

9-3 意味の研究

9-4 非言語コミュニケーションの可能性



今、世界中で話題の猫ネタ「ネコ転送装置」である。猫が小さな箱に入りたがる性癖はよく知られているが、装置の発明者兼飼い主は、もしかしたらと一思っ赤いビニールテープで畳に丸を描いてみたところ、やっぱり入ったとのことである。猫が箱に誘惑される本能—先祖の棲みかに係わる記憶—が色々と忖度されるが、この猫のふるまいは明らかに、後天的に習得された記号行動である。仲間の猫ちゃんも丸入りにチャレンジしたので、再現テストにも成功している。立派な環境行動実験である。

<都市のインテリア>の着想を他人に話すと、例外なく共感していただける。住宅の居心地を研究するよりも街の居心地を研究の方がテーマを客観化しやすいし、なによりも成果を公共化できるからである。しかし、例えば道端のベンチに様々な思い>があったとしても、それを研究テーマとして客観化する<考える>にはある種の精神的飛躍が必要であるし、見つけた現象がただの偶然ではなかったか、いわゆる再現性を担保するための実験計画<試す>が欠かせない。私たちはケーススタディーを目指すと決めて、この責任に対処することにした。ケースとは類型化できる（だから偶然ではない）対象のことであるし、章が重ねられたとしたら、再現テストにもパスしたことになるからである。

しかし経験則をいくつか重ねることができたとはいえ、やはり、これらに共通する蓋然性を見通す何らかの<見立て>が欲しい。これが「科学する」の主意である。「環境行動」とは私たちが路端のベンチに遭遇したとき取る行動の<見立て>であり、厳密に書けば環境・行動系（システム）からの説明である。

幸い、私たちのつたない欲求に応える環境行動ハンドブック*1 が、半世紀に近い先人の歩みとして 2006 年に出版されている。これによって私たちのケーススタディーを俯瞰して、以後のケーススタディーへの<中締め>としたい。なお、同書は豊富な引用文献（筆者は近づく方法を持たない）にもとづいて書かれている分、結果的に著述が概念的である。そこで時に筆者が知る具体例で補筆するわがまを、ご容赦願いたい。

* 1:

「構築環境の意味を読む」エイモス・ラポポート著

高橋鷹志監訳、花里俊廣訳

彰国社、2006.6.10

The meaning of the built environment

／A nonverbal communication approach by Amos Rapoport

9-1 監訳者によるまえがき

ラポポートの原著作の翻訳を企画した監訳者高橋鷹志は、一見平易な文言でつづられたタイトルを、1985 年のある出会いをきっかけとする人間・環境系（システム）研究の歩みのかたちで、改題してみせる。

建築業界ではごく当たり前に建物環境 Building environment と呼んでいる対象を、建築研究者はただの<建物>であってはならないという理由で抽象普遍化し、Built

environment と呼ぶことにしている。さらに、新奇さ New の発見を目指す建築家とそれをサポートする研究者は、建築表現 The expression of ーを研究対象とすることを当然としている。ただのモノ作りではないと言いながらも、建築学研究者は本来的に建てる側に立っているのである。

しかしやがて、環境開発が飽和状態に近づき、穏やかな開発、持続的開発が求められるようになると、改めて認識され期待されたのが、多様な民族や地域が保有する文化的なパワーである。そこで従来の建築学術に危機感を抱くニューウェーブの建築研究者は、研究対象を The meaning of ーに移すことを提案した。「意味を読む」とのタイトルは、建てる側にある建築家研究者にとってはコペルニクスの転向を意味する。

では built environment をどう訳すか。〈建築環境〉では原著者の思いが尽くせないとして、監訳者は〈構築〉というやや生硬な感じがする用語を当てている。都市から衣服まで含むより広範囲の、〈構造化された環境〉の意であるという。人間環境に対する高橋氏の〈思い〉と〈考え〉と〈実験〉のすべてが、この数語のタイトルの解説に込められている。監訳者と著者 A.ラポポート氏の出会いは、1985年にアリゾナ大学で開かれた「人間・環境学会」の第二回日米セミナーの席上であったとのことである。だから本書「意味を読む」は、建築系と心理学系の研究者からなる学際的、国際的交流の成果なのである。研究領域という縄張りが楽々と超えられている理由が納得できる。

最も身近な構築環境といえるインテリアは、そこに住む人と同様に豊かな(むしろ過剰な)意味をまとっているから、built environment をインテリアと訳しても間違いではないと思われるが、それでは余りに我が田に水を引くことになる。そこで筆者たちは、〈都市のインテリア〉と呼ぶ普遍的な研究対象を提案しているわけである。

9-2 意味の重要性

筆者ラポポートは同書の序文において、環境-行動研究という流儀からこの主題に取り組むと宣言している。しかし本文に入ると、人が環境の意味を読む様々なシーンの叙述とその解明方法が記され、行動という語は出てこない。だから同書が〈記号行動〉についての研究書であることは、暗黙の了解事項のようである。

環境の文章表現

記号行動-人間はどのように、何にもとづいて環境に反応するか、そして何よりもそれをどうやってそれ観察するか。ラポポートは1966年のカリフォルニア大学バークレー校での体験をヒントに、環境の文章表現に観察実験の可能性を見出している。バーク

レー校ではたまたま英語の教育実習生を対象に、殺風景なゼミ室を文章で描写する課題が出されており、御用済みとなったまとまった文章例題が入手できたという。

ある例文、

「部屋の隅のピアノ、壁の楽譜、散らかった楽器などから、この部屋が音楽に使われていたのは明らかだったが、手術室を思わせる緑色の壁は外科的な飾り気のない雰囲気を感じさせ、音楽の官能的な錯乱状態とは矛盾するものだった。地味な長い机、簡素で実用的な椅子、まぶしく白い照明などが、これをさらに助長した。」

文学部のセミナーでは、集められた例文は文章表現のパターンの研究と洗練のために使われたはずであるが、ラポポートが注目するのは、色、光の質、エアコンの雑音、家具など言語表現による環境構成要素の識別である。部屋の目的や性格、雰囲気を特定するために、人々はさまざまな環境構成要素を用いることが分かったという。

言語表現の特徴

ことばによる環境の把握は、感情的かつ包括的である—とラポポートは言う。例えば連想語テストによる都市イメージの調査はきわめて断定的である。都市の住み心地は、物質的な検証以前に、工業都市か田園都市かというイメージで決まる。見方を変えればこれは言語把握の欠点でもあるが、だからこそラポポートは、環境が人々に対してもつ意味の重要性（重み）を、改めて思うのである

ところで筆者は以前に、包括的 inclusive という非科学的な響きがある概念に、情報理論で用いられる情報エントロピー（情動的あいまいさの尺度）という物差しを当ててみたことがある。例えば住宅の〈洗面所〉はトイレに次いでエントロピーが低く単一機能的であり、反対に〈居間〉は、住まいの中で最も複合機能的な、混沌とした用途の部屋（というよりスペース）であった。ではどちらの意味がより濃い inclusive といえるか。文句なしに居間の方であろう。この実験（行為室やスペースの呼び名を調べた）によって〈意味〉と〈情報〉が対立概念であることを納得した。

機能と意味

モダニズム建築が前代のくびき（人の自由を縛る制度や習慣）から脱するために、意味を極力はぎ取って機能主義を標榜するに至った理由は理解できる。しかし機能もやがては意味（機能の潜在的側面）をまとうようになる—とラポポートは言う。実用物が意味を派生する過程をラポポートは4段階に定義しているが、説明は概念的であるので、ここでは実例を引いて書き留めておきたい。

レベル1．例えば〈座る〉という活動の認識

レベル2．〈椅子〉による座る活動の機能化

レベル3. <様々な椅子>を用意することによる人の活動（食事、団らん、休息、接客等）の分節化

レベル4. 椅子を使う活動はやがて様式化され、社会的ステイタス、地域的習慣・文化といえる意味を纏うようになる。ラポポートはこれを<潜在的機能>と呼び、レベル3までの<顕在的機能>と区別している。

意味は機能から切り離された存在ではなく、意味自体が機能の最も重要な側面である（記号機能と呼ぶことができる）としてラポポートは、衣服、家具、造作、建物、庭、街路など物理的環境を、自己表現やグループアイデンティティーの確立に用いるよう提案する。物理的要素は視覚的かつ文化的に安定したカテゴリーをつくり、意味を持っている。しかし意味は、人々のスキーマ（図式化された経験）に合致したときのみ解読可能である。

設計者にとっての意味とユーザーにとっての意味

ではラポポートは意味の情動的根拠をどのように説明しているか。ラポポートが着目するのは、設計者とユーザーの間の感覚的な齟齬の話題である。

まずイギリスの公営住宅の例が挙げられる。公営住宅は民間分譲住宅よりも高品質であるにもかかわらず、それがモダニズム建築であり、さらにそれが公営住宅の烙印であったゆえに、忌避されたという。民間分譲住宅には小さく区切られた伝統的窓枠、古典様式の玄関、低いフェンスで囲まれた前庭を備えていた。設計者はレベル2を重視したが、ユーザーはレベル4での選択がより重要だったのである。

続いて、アメリカの高級住宅地で起きた事件が取り上げられる。高級住宅地の通例として設計者もユーザーもモダニズム建築には批判的であり、設計者は新風土主義、歴史主義、ポストモダニズムを標榜し、出窓、羽目板、持ち送り等19世紀的建築要素を多用してユーザーの期待に応えようとしたにもかかわらず、不評だったという。設計者にも意生地があって、それら建築要素の使い方を微妙に変えたことが、ユーザーに見とがめられたのである。レベル4の中でも一というより中でこそバトルは起きる。

ラポポートはモダニズム建築がユーザーにとんでもない誤解を与えた例を取り上げている。アムステルダムのある建物では、抽象図形からなるファサードの白いフレームが十字架に見え、中の黒いインフィルが棺桶に見えると非難されたという。建物は老人ホームであったから非難はなおさらである。筆者が知る事例では、アルド・ロッシが設計したコンクリート打ち放しの幼稚園が、刑務所に見えると父母に忌避された事件がある。刑務所は見方を変えると名建築であるとうがった知見が建築家の間で流布しているが、一般ユーザーはなぜ見方を変えないといけないのか理解できなかった。

専門雑誌で絶賛された建築がユーザーの不評をかう理由は、＜作品＞の紹介記事を見れば明らかである。統一感と調和が強調され、ユーザーの参加は期待されていない。ユーザーの不満が露呈した例としてラポポートは、有名建築家が建てたある社屋における社員の抵抗運動を挙げている。経営者は設計イメージを護るために、社員の私物の持ち込みを禁止したという。しかしその企業は放送関係の企業であり、社員もまた表現者であることを自負していたから、会社の規制に激しく反論した。結局、社員側が勝ったという。双方とも大人、何らかの妥協点が見出されたのではないかと推察される。

住宅改造の重要性

ユーザーにとっての意味は、集合住宅において特に重要である。集合住宅にとって最も大切な意味は、環境のパーソナライゼーション（個性化）とアイデンティティー（自己同一性）の確立である。それらは竣工時に完成するものではなく、幾度かの改造を重ねるうちに育つものである。しかし住宅環境の順応性や設計の変更可能性が事前に議論されたとしても、設計者のアイデアは、顕在的機能（手段的機能）のレベルに終始する傾向にある。どういった変更が環境のパーソナライゼーションを可能にし、変更によって別の人やグループが何を読み取るのか等を解明する必要がある。

以下、モダニズム住宅の改造を機会とするパーソナライゼーションとアイデンティティーの回復に関する試みが、次々と紹介される。例えばコルビジェが設計したベサックの集合住宅では、フラットルーフにこう配屋根が乗せられ、水平連続窓は小さく区切られ、錠戸が追加された。小説の中のモダニズム住宅は、読者を喜ばせる話題（ネタ）として使われている。モダニズム住宅をけなしてさえおけば、読者は自分の感想が間違っていないかと安心するからである。モダニストは美を知覚レベル（レベル2）に還元して新奇の美を表現してきた。しかし一般ユーザーにとって大切なのは、住宅構成要素が備える連想的な意味（レベル4）の方なのである。

文字使用以前の文化

環境を形成する要素が意味を派生する過程をレベル1～4のように描くと、生物は常にこの順序で環境への理解を深めているかのように思うが事実は逆、スタートラインはレベル4の連想的意味の方にある。人類史を見る限り、原始社会は自然の力に恐れおののく呪術の世界であり、人類は抽象化の能力によって文明化した。冒頭の「ネコ転送装置」は、人の環境に住むうちにネコにも環境を抽象化する能力が備わったのでは一との仮説の実証実験である。もちろん楽しいジョークのレベルであるがー。

ラポポートは連想的意味が支配的だった旧文化について、いくつか事例を挙げて考察している。オーストラリアのアボリジニは移動生活をする民族であったので、様々な

連想の要となる〈場所の特徴〉にとりわけ執着していたという。先住民の原始芸術（装飾）は、斬新な造形と色彩ゆえに美術品として知覚的に評価されることが多いが、本来の目的は環境についての連想的意味を表すことであり、意味深長であることが、装飾が限りなく複雑な理由のすべてである。インドの伝統的な建築は、神聖な意味を表現する〈シンボルの技術〉であり、他の国々の伝統集落も同様である。同じことが中世の大聖堂についても言える。研究者は〈科学の光を当てる〉としてこれを空間、光、色彩、構造力学等の知覚的尺度を使って分析的に評価するが、大聖堂が作られた本来の目的は、ひとえに〈神学的意味の集大成〉としてであった。伝統集落について述べたことは、都市空間にも当てはまる。都市の理想像について語るとは、つまりは連想的意味に結び付けられた尺度（社会文化的スキーマ）について語るとのことである。伝統的なバナキユラー建築では神聖なものや世俗的なものの区別が現代ほど顕著ではないが、その理由は、元来住まいのすべてが、神聖さによって意味を与えられてきていたからである。

連想的意味の重要性は、今日の住環境においても認識されはじめている。街、住宅団地、マンションのイメージは、物理的環境に劣らず重要である。

9-3 意味の研究

意味の研究は三分野で進められてきたという。まず伝統的な象徴人類学において、次に人類学、心理学、民族学における非言語コミュニケーションの研究において、そして言語学から発展した記号論の応用研究が続く。これら意味の研究に通底する思想が、20世紀の知性（1960年代に登場した）ともいべき構造主義である。機能レベルでは未開の地と文明国の間では大きな隔りがあるが、しかし意味のレベルで見るとかぎり（意味は構造から生まれる）、未開人も現代人もさほど変わらない（例えばC.L. ストロースの「具体の科学」）とする、人の本質的な能力にかかる平等な視点が、構造主義がすぐれて知性的と言われる所以である。ラポポートが潜在的意味の重要性を繰り返し主張する理由も、その主張へ共感しているからではないか。

意味の研究に関するトピックス

結局ラポポートは、第三の記号論からのアプローチを選んで詳述してゆくのであるが、その前に意味の研究に関する技術的トピックスをいくつか紹介している。行動を科学するとの本章タイトルに照らし、筆者の理解を交えてまとめておきたい。

ラポポートはまず、心理学の分野での意味の研究事例として、モノが与えて afford くれる行動を定式化したギブソンのアフォーダンス理論（3章一緒に座る／公園ベン

チ参照)を取り上げる。しかし心理学という学術領域を護る限り、モノの可能性は論じ得たとしても、ラポポートが求める潜在的意味や文化的価値の探究には踏み込めないとして、これを棚上げする。

続いてラポポートは、アメリカの心理学者オズグッドが開拓したSD法(意味微分法—Semantic Differential Method)を取り上げる。SD法とは評価対象を複数の形容詞対(例えば、暖かい—冷たい)を使ってモニター(被検者)に評定させ、集められた評価プロフィールから対象群に潜在する情報(類似性と差異性からなる)を探り出そうとするものである。形容詞対の順序を変えると評価プロフィールは違った勾配を描き、うまく行けば評価対象を分類する対立軸(因子)を見出すことができる。しかし無限と思える繰り返し作業はコンピュータの援用なしでは不可能であり、普通は多変量解析法のひとつ、因子分析 factor analysis に進む。因子がひとつ見つかり二番目の因子の存在が探られ、続いて三番目が探られる。三因子は意味空間を形成するから、その中に対象群を因子に寄与する比率にしたがってプロットすれば、対象群の情動的相互関係が目視できるようになる。色彩環境の評価では<評価性因子 evaluation、快い—不快等><力量性因子 potency、強い—弱い等><活動性因子 activity、騒がしい—静かな等>の三因子が識別され、色彩(色感)の三要素*²として色彩学では定説化されている。

モニター(実験協力者)の言語表現を通して環境イメージを探る方法を端的に説明すれば、客観性が高い単純な言語表現を統計的に集約して、より上位の<包括的>な言語表現を得る考え方である—といえる。工学系大学の都市美研究では、標準的な言語感覚を備える市民の存在を前提にして都市環境の良し悪しを判定するために使われる例が多いが、しかし、言語表現を通して行なう問いは、モニター自身の言語表現の発達と個性の開発に関わる問いでもある。実例としてラポポートは、環境評価をインタビューのかたちにシフトしたパーソナルコンストラクト理論(人の認知構造は形容詞対の束として表現できるとする理論)とそれにもとづいたレパトリートリーグリッド法(モニターを介した調査手法のひとつ)を紹介している。

ラポポートは触れていないが、C.アレクザンダーはボタンランゲージの研究に先立って、環境をSD法のような数値変量でなく、特徴のあるなしを0と1で記したデータ(特徴変量)を使って建築・都市環境を分別する研究手法を試みている。名詞は形容詞よりも<包括的>であるという点でデータとして優れているが、モニターによる評定を介さないで、研究者自身の言語能力と見識が問われることになる。

意味とは結局は相関関係のことであるので、ラポポートはこれらの研究手法に関心は示すものの、なお<実験室的>であるとして、より広範囲の対象を選んだ事例研究の必要性を説く。アレクザンダーが相関分析を棚上げし、ボタンランゲージという事例研

究に進んだ経緯と同じである。

* 2 : 色彩の三要素

普通言われている色彩の三要素<明度><彩度><色相>を<色覚の三要素>であるとして<色感の三要素>と区別すれば、色彩に対する理解に奥行きが生まれる。

記号論からのアプローチ

構築環境の意味の研究が、人の言語活動を広く表現活動全般に敷衍する記号論に託されるのは当然であると、その方法論としての妥当性を認めつつもラポポートは、極端な抽象化と難解な用語と、深遠な理論構築の意義を疑わせる実践的な研究の不毛さに当惑する。その理由がいくつか挙げられているが、筆者は引用先に近づけないので、筆者が知る具体例によってラポポートの指摘を考えてみたい。

世界的な大学紛争がきっかけとなって建築学のこれからは模索されつつあった 1979 年 4 月、日本建築学会誌「建築雑誌」において、黒沢隆を主幹とする「もうひとつの建築論—建築における構造主義」が特集された。モダニズム建築は「かたちは機能に従う」とのサリブァンの至言に鼓舞されたというが、今度はソシュールの「意味は構造から生まれる」に触発されるのであろうか、記号論に関心をもつ建築家・研究者を総動員しての意欲作であった。

特集の論旨については学会の論文集に発表しているので*³、そちらを照会していただくこととして、ここで述べたいのは論者グループの際立った対立である。歴史家、建築評論家等の著述家は、ソシュール言語学に範をとって建築の意味を読む姿勢を取るのに対して、建築家グループの論調は建築表現の言語化に終始した。建築分野には建築言語という常用語があるし、言語学での語尾変化の説明にギリシャ建築の柱頭変化(ドーリック、イオニック、コリンシアン)が引用されたという成功体験があるから、理論的完成を目指す時が来た—との高揚感が難解な用語の使用に繋がったのではないか。特集のあとがきで黒沢は、建築記号論のバイオニア磯崎新が、記号論だと思っていたのは実は(建築における)統辞論であったと言った—と書いている。

* 3 :

「1970 年代構造主義の議論から読み解く「もうひとつの建築・インテリア」の地平 — 「もうひとつの建築論—建築における構造主義」(建築雑誌 1979. 4) を題材として—」
日本インテリア学会論文報告集第 24 号

記号論と記号学

記号の研究方法には、作品に潜む意味や思想の解釈に重きを置く言語学者フェルディナン・ド・ソシュールが拓いた semiology と、論理学者チャールズ・サンダース・ペーアスが拓いた記号表現の普遍拡大を特色とする semiotics があり、前者には記号学、

後者には記号論という訳語が当てられている。そしてラポポートが影響力の大きさ認めつつ難解さを論難するのは、パースの記号論の方である。

パース記号論によれば、記号現象—何かが記号として機能するプロセス—には常に次の三要素が見出されるという。

記号媒体（記号として機能するもの）

記号対象（記号が指し示すもの）

解釈項（モノが記号である証拠として解釈者に与えている効果）

解釈項は他の二項の上位言語であり、上位言語は新たな指示対象として更に上位の言語に捉えられる—というふうにして、意味は重層構造を備えるに至る。記号は意味作用の深さによって<信号 signal><記号*⁴ sign><象徴 symbol>に分類される。つまり記号研究のプロセスは下位から上位へとボトムアップ式に進められるので、論理的で自然科学的な、<科学する>印象がもたれる。しかし、「散歩の途中でつい立ち止まってしまう気になる場所」の魅力の証明を交通信号の意味作用の確かさから始めないといけないとしたら、大変なことになるのではないか。

ラポポートはパース記号論で述べられた記号研究の三分野—

統辞論（記号体系における記号と記号との関係の研究）

意味論（記号と指示対象との関係の研究）

実用論（記号と現実との関係の研究）

を引用して、自身の研究課題が実用論にあるとの見解を述べる。くり返し使用されてきた<意味>が、単なる指示対象のことではないとの説明が、ここで（記号論において）なされたわけである。

* 4：狭義の<記号>ということになる。

意味は文脈が決める

ラポポートは記号と現実との関係は一様で不変なものではなく、時間的空間的文脈の中で別の意味をもつことがある—と述べて、抽象的な場所で意味を議論することの不毛さを訴える。例えば植民地時代のアメリカでは、町は（良い）、森は（野蛮、悪い）とイメージされていたが、現代はまったく逆にイメージされている。どの国の教会も、傾斜屋根、ドーム、アーチ、天然素材、彩色などで周囲の建物と建築的文脈を変えて、特別な場所であることを明示している。文明社会では日干し煉瓦、古びた下見板、ハーフティンバー、草ぶき屋根などに良い意味が与えられ、発展途上国では亜鉛メッキ鋼板やコンクリートに良い意味が与えられ—等々。実用論の無視、統辞論に集中し他を無視する傾向こそ、記号論的アプローチの深刻な欠点である—とラポポートは指摘する。言語構造よりも文脈の研究の方に力点を戻すべき—との主張である。

私たちの〈都市のインテリア〉では、タイトルの意味を定義する予定がまったくないが、どうやらそれでよさそうである。

象徴論からのアプローチ

一旦は構造よりも文脈を大切にーと主張したすぐ後で、レポートは再び構造に理解を示す。しかし彼は、議論の展開に混乱しているわけではない。レポートが問題にするのは〈言語構造〉へ過度の執着であって、読める環境を維持するためには、〈意味の構造化〉は欠かせない。構築環境 built environment の象徴論的研究は、歴史的な建築やバナキュラーな環境の研究において伝統的なアプローチであるが、記号論的分析よりは今なお有効であるとして。世界各地での様々な適用例が示される。

筆者が関知した事例で説明に代えたい。筆者が若手の設計教員として卒業設計を指導していたころ、先輩格の磯崎新氏から全国の卒計生に向けて、「軸線をさがせ」との号令が発せられたことがある。卒業設計に描かれる建築物は、ただ実用に供せられるだけでなく、土地に関わる何らかの意味（さらには価値）を発信する必要があるとのご宣託である。想定敷地に土地鑑を持たない学生は当惑したが、国土地理院の地図で敷地を調べると、すでに存在が忘れられたような祠や社（やしろ）の所在が必ず記入されていることに、また驚いた。土地とはそういうもの（聖なる意味で護られたもの）なのである。今日でも、社があった土地がビル化する際には、社はビルの屋上に移される。ビルオーナーの信心はともかく、誰も社を廃棄する責任は負いたくはないのである。

シンボルは過去の世界においては現代よりも広範囲に社会的合意がなされていた。それにつけてもーとレポートは不思議がるのであるが、大衆的デザインにおいて今なお機能しているシンボルを、建築家はなぜ毛嫌いするのか。チェーン展開する食堂はシンボルを多用して、客にTPOを的確に伝えているではないか。すっきりさっぱりのもダンデザインでこれができるかーというわけである。

しかしレポートは、研究領域の設定にも研究手法の選択にも慎重である。記号論の立場から見ると環境要素のすべて〈記号〉に見えたように、象徴論から見るとすべてが〈シンボル〉に見えてしまうかもしれない。用語に引っ張られる愚は避けねばならない。そこで新たに選ばれた統一的用語が〈非言語コミュニケーション〉である。

9-4 非言語コミュニケーションの可能性

非言語行動の研究は様々な分野で一特に心理学や人類学の分野で一大きく発展してきているという。人は言語と言語以外の音声と非言語行動、たとえば顔のしぐさ、身体

の位置や姿勢、ボディータッチ、ジェスチャー、によって情報をやりとりしており、三者は不可分であるとして、非言語コミュニケーションの重要性が指摘されているわけである。観光等国際間の市民交流がさかんになると、ちょっとしたしぐさによる誤解が話題になるようになった。違いを正すことはもちろん重要であるが、違いを理解することの方がより重要ではないか。

言語行動と音声行動は聴覚器官で受容される。一方非言語行動は、視覚的に知覚されるとして研究されてきた。しかし本来、コミュニケーションは多経路で行われるべきものであるとしてラポポートが新たに重要性を主張する経路が〈構築環境〉である。例として衣服、セッティング（食事やティータイムのしつらえなど）、そしてプロクセミクス（4章）が挙げられ、これらは小規模すぎるとして、ラポポートは応用範囲の拡大普遍を目指す。目指すべき対象―構築環境は例えばインテリア、そして（意味の存在が重きをなす範囲の）都市環境である。

（以下省略）

後記

以上が全7章で構成される「構築空間の意味-読む」の、プロローグに当たる2章までの筆者なりの要約である。環境心理学を実験室的過ぎると後にし、統辞論に熱中する建築記号論を意味不明として退け、現実の〈生きた〉構築環境を非言語コミュニケーションとして対象化し直すまでのラポポートの〈科学する歩み〉を、浅学ながら―というよりは浅学ゆえに―斜め読みして分かるところだけを要約してみた。3章からは非言語コミュニケーションのより具体的な考察が始まるが、ここからは何かアイデアを思い付いた折りのレファランス用にとっておきたい。

さて再び、インテリアとは何か―である。筆者自身は郊外戸建て住宅の〈意味〉の研究に一段落をつけたのを機会に、工学部から生活科学部に職場を移し、建築空間の〈意味〉の研究を続けるために日本インテリア学会に入った。本来のインテリア学はラポポートの言を借りればセッティング学であろうから、課題として微小すぎるとしてその先に進もうとするラポポートのご教示は〈都市のインテリア〉を標榜するわれわれには実にありがたい。しかし室内を出る場合はやはりその都度、各自の〈思い〉を吐露し、できれ〈考え〉を述べてからにすべきであろう。そうでないとラポポートが本書を通じて見せてくれている〈精神的飛躍〉の努力に対して、失礼になるからである。お墨付きにしてはならない―とは思ふ。

では都市のインテリアを科学する〈見立て〉は、どのようなものであったか。我田引水を承知でまとめてみたい。

まず研究の目標について。都市環境のパーソナライゼーション（個性化）、および住む人訪れる人のアイデンティティー（自己同一性）の確立であるーと定めてよいのではないだろうか。尾道坂の町では、訪問者は昭和戦前の、クルマ社会以前の街並を体験できるが、古民家を移築して作ったテーマパークではない活きた街ゆえの危うさが、余計に強いアイデンティティーが喚起される。例えば、帰ったら自分の町でもできることをやろうーとか。

都市のインテリアの研究では街のディテールに執着するが、それはそれらが読解するに足りる非言語コミュニケーションを形成していると考えられるからではないか。アフォーダンスか記号機能かなど専門分野での縄張り争いは、冒頭に挙げた「ネコ転送装置」が説明できない以上は、棚上げとしたい。

最後に意味とは何か。ラポポートは伝統的な象徴論を捨てるべきではないと繰り返す。象徴論は分析や実験とは対極にある達観主義である。尾道坂の町では、視界が閉ざされた隘路を記憶とガイドブック（非言語および言語コミュニケーション）を頼りに散策するが、時に視界が開けて安寧寺三重塔や隣接する山系の霊峰を眺望し、自分の立ち位置を確認する。地道な実証も時には達観を必要とする。

都市のインテリアと呼んでみた構築環境 Build environment の一ケース、取り組むに足りる研究対象ではないだろうか。

後記2

ところで、ラポポートをはじめ意味派が糾弾するモダニズム建築は、そんなに悪かったか。人が新しいものを生み出そうとする<近代化>能力とは、端的に言えば抽象化能力のことである。三次元なら二次元に、二次元なら一次元に、次元を減らして考えるとものごとがはっきりする。例えば現代人が頼りにする数字は、一次元の表現である。

モダニズム建築家は、建物から意味をはぎ取り、素（ス）の建物を提供しようとした<だけ>のではないか。その方が新しいライフスタイルを（もし住まい手がそれを望むなら）引き立てるからである。モダニズム建築は絵ではなく額縁ではなかったか。

筆者は尾道坂の町の再生活動に強い共感を覚えているが、<スの尾道>の良さに共感できるからではないかーと今、思い当たっている。